令和８年９月５日

281号

北の療育



● 報告　令和７年度　決算報告／木村浩司

● 視点　相模原殺傷事件から10年を迎えて思うこと／時田明嗣

社会福祉法人　北海道療育園

北の療育　281号

● 巻頭随想
・AIと「風の谷」 ―― 松尾　彰久 ― 1

● ＝感謝を込めて＝
彫刻家・笹戸千津子先生から彫刻５点のご寄贈をいただきました
― つつじの里の正面・前庭・中庭に設置、
令和８年７月５日に除幕式を挙行 ―　― 丸山　静男 ― 5

● 療育園花火大会を開催して ―― 岡村　理恵 ― 7

● つつじの里夏祭りを開催して ―― 篠原　宏佳 ― 9

● グラビア
・療育園花火大会・つつじの里夏祭り・彫刻除幕式・
美幌療育病院 夏の療育活動 ― 12



● 旭川通園事業所「旭川通園だより」 ―― 中島　啓幸 ― 16

● サンルーム・春から夏の療育活動
・みんなでつくるもの ―― 北海道療育園 ― 大西　涼太 ― 17
・みんなで楽しく活動を！―― 美幌療育病院 ― 尾形　侑真 ― 19

■ワークセンターぴぽろ
● ぴぽろだより
・美幌療育病院売店開業、防災訓練・消火訓練、GH花壇整備　他 ― 浦野　紘史 ― 21
● あすなろ通信
・端午の節句、北療祭の準備、新しい仲間、他 ―― 内田　久勝 ― 23

CONTENTS 2026.9

● らせん
・むかしといま　重症児者のリハビリテーション　その2
— うつぶせ保持具　はじめて物語 — ——— 髙森　智春 — 25

● 「けあぷらす」の活動紹介
・訪問看護でのリハビリテーション ——— 神田　友行 — 27

● 視点：相模原殺傷事件から10年を迎えて思うこと— 蒔田　明嗣 — 29

● 北海道重症心身障害児(者)を守る会創立30周年に思う
〜支えているつもりがいつしか支えられ〜
北海道重症心身障害児(者)を守る会　会長　太田由美子 — 39

● みち
・理事長就任にあたって——— 三田　一弘 — 41
特定非営利活動法人　とらいあんぐる事務局通信
・順調に事業は進んでいます ——— 長野　聡幸 — 44
美幌療育病院父母の会事務局通信
・戦いの違い——— 齊木　敦子 — 46
つつじの里利用者と歩む家族の会事務局通信

● 報告：令和７年度の決算報告 ——— 木村　浩司 — 49

● ご厚意ありがとうございます
・寄付金一覧　・物品寄贈一覧　他 ——— 61
・職員異動一覧 ——— 62

インフォメーション

・作業療法作品の紹介「ちぎった色画用紙で作った作品」第一療育課　藤井浩子さん — 11
・旭川養護学校で運動会を開催！／みんなで作ったビックアートをお披露目！ ——— 24
・訓練棟で「俺のかき氷」販売！／総合避難訓練と煙洞訓練も実施！ ——— 48
・看護師さん募集！笑顔・いのちの輝き・かかわること。看護の原点がここにあります！ — 60

表紙Photo:
桂月岳(大雪山系／標高 1938m)から観る朝陽／浅井洋子

AIと「風の谷」

松尾彰久

「肌に肌でふれる療育の真髄に徹します」
（北海道療育園開園三周年職員宣誓より）

近頃、新聞を広げてもインターネットを覗いてもＡＩというアルファベット二文字を目にしない日はない。ＡＩ（人工知能）の進化は、日々怒涛の勢いで進んでいるらしい（よくわからないので「らしい」と言うしかない）。ネット空間や工場だけの話かと思いきや、今やＡＩを搭載した人型ロボットが登場し、いよいよ私たちが生活するこの現実社会に進出してくるらしい。私にはＳＦ小説の世界にしか思えないのだが、しかしこれはフィクションではない。

今朝（七月十五日）の日本経済新聞に、ソフトバンクグループの孫正義会長の記事が載っていたのだが、これから十四年後の二〇四〇年には世界で十億台の人型ロボットが稼働するようになるというから、日本でも数百万台かそれ以上のロボットが私たちの周りでハタライテいるかもしれない。調べてみると、人口減少で喘ぐ医療や介護の業界に導入する計画がすでに動きはじめているらしい。人類とＡＩが共存する世界とはどんなものなのだろうか。

さて、ここからしばらくは私の夢想である。七年後の二〇三三年にワープする。

人口減少が進む美幌町で当法人が経営する美幌療育病院が職員確保に難渋している。すでに十名ほどの外国人を雇用しているが、それでも定数を満たすことができず、施設長以下幹部職員は検討の末、新たな手段として医療・介護用に開発されたＡＩを搭載する人型ロボット（ヒューマノイド）五体の導入を決断する。

あらかじめ美幌療育病院の必要最低限の情報と各ロボットの名前（デヴィット、ハナ、ユリ、ホン、ティリ）

と性別などは業者に依頼して入力してもらっている。そしていよいよ五体のロボットが納入される。まずは辞令交付である。一人ひとり（？）に理事長から採用辞令をわたす。そしてこれから一か月間はまず研修である。電子カルテに入力されている利用者の情報や個別支援計画などの他に、もちろん法人の基本理念や院内の各部署の業務内容、それから職員の名前と職種、職階も必要だろう。ロボットには自律型ＡＩが搭載されているので、自分の置かれている立場や状況、また知識などを教える（入力する）たびにどんどん成長していく。外国人に対して丁寧に教えるように考えたらよいかもしれない。したがって各ロボットの名前は国際色豊かにしてみた。デヴィットは英国人、ハナは韓国人、ユリは帰国子女の日本人、ホンはベトナム人、ティリはミャンマー人である。男性一人に女性四人の構成である。もちろん日本語の他にそれぞれの母国語も堪能にしてあるから、すでに特定技能外国人として働いているミャンマーの職員とティリはミャンマー語でも話ができるのである。

それから半年後のある日、職員の山田さんが利用者の花子さんに食事介助をしている場面である。すっかり施設に慣れたティリがその手伝いについている。

山田さん：「花子さん、どうしたの？今日は食べたくないのかな～？。ティリ、花子さんは朝食と昼食全量食べたかい？」

ティリ：「記録には全量摂取と書いてあります。昨日も一昨日も全量食べています。三か月前までさかのぼると…、山田さん、ひと月前に半量しか食べていない日がありますが、今日と同じメニューです。このおかずが嫌いなのかもしれませんね。」

山田さん：「ティリ、ありがとう。そうか嫌いそうな食べ方だものね、あまり無理しないでおこうか。」

ティリ：「花子さんはバナナが好きですから、給食に連絡してバナナを一本もらいましょうか。」

山田さん：「そうだね、それがいい。ティリ、じゃあ食器を片付けて、花子さんの薬を持ってきてください。それから記録もしておいてね。」

ティリ：「了解です…記録しておきました。…それから、これが花子さんの薬です。チェックしてください。」

山田さん：「はい、花子さんの薬に間違いないです。ティリ、ありがとう。」

こんな具合に職員の手伝いをしてくれるようになるのだろうか。ロボットは休憩もなく二十四時間動けるから、夜勤では巡回見守りや掃除、ベッド柵の消毒なども出来るだろうか、職員三人分のハタラキをすることになるのだ

ろうか。当面は職員の手伝いや間接的な業務をしてもらうとして、さらに進化してくると車いすへの移乗や入浴介助もできるようになるのだろうか。そして肝心なことだが、はたしてロボットは利用者の信頼を得られるようになるのだろうか。ロボットは感情に揺れることはないから、怒ったり、怒鳴ったり、イライラしたり、嫉妬したり、忖度したりすることもないだろう。職員間の人間関係のイザコザのようなことも心配しなくてよいはずである。穏やかで幸せな日常のある施設づくりにつながるのだろうか。そんな…とめどない空想をしてみた。

ここから話は少し飛ぶ。

冒頭で述べたように科学技術の進化には驚嘆するばかりであるが、しかしその背後で動いているのは、グローバルな資本主義経済のなかでお金をめぐる生き残りをかけた企業間の競争であり、国家間の負けられない覇権争いである。医療や福祉の世界がその恩恵を受けることばかりを喜んでいられない。科学技術の最新の成果は、軍事にも利用され今も世界のどこかで使用されている。また将来、人類の知能をはるかに超えたＡＩ（人工超知能）が出現し暴走を始めるかもしれないと警告する科学者や哲学者もいる。

そのような科学技術の進化の危うさを思うとき、私がいつも思い出すのは『風の谷のナウシカ』である。宮崎駿監督のアニメ映画『風の谷のナウシカ』ではなく、その原作となるマンガ版『風の谷のナウシカ』のほうだ。マンガ版『風の谷のナウシカ』は、宮崎駿が月刊アニメージュに一九八二年から一九九四年まで間欠的に発表した作品で、現在、徳間書房から全七巻で発売されている。アニメ版の映画はその初期の部分を少し設定を変えて作られた別の作品である。

そのマンガの表紙裏と裏表紙に、作品の背景とナウシカが生まれた「風の谷」について次のように書かれている。やや長いが引用する。

ユーラシア大陸の西のはずれに発生した産業文明は／数百年のうちに全世界に広まり／巨大産業社会を形成するに至った／大地の富をうばいとり大気をけがし／生命体をも意のままに造り変える巨大産業文明は／一〇〇〇年後に絶頂期に達し／やがて急激な衰退をむかえることになった／「火の七日間」と呼ばれる戦争によって都市群は有毒物質をまき散らして崩壊し／複雑高度化した技術体系は失われ／地表のほとんどは不毛の地と化したのである／その後産業文明は再建されることなく／永いたそがれの時代を人類は生きることになった

かつて栄えた巨大産業文明の群は／時の闇の彼方へと姿を消し、／地上は有毒の瘴気を発する／巨大菌類の森・腐海に／覆われていた。／人々は腐海周辺に、／わずかに残された／土地に点在し、それぞれ／王国を築き暮らしていた。／――風の谷――／そこは人口わずか五〇〇人、／海からの風によって／かろうじて腐海の汚染から／守られている小王国であった。

風の一族は、巨大産業文明が崩壊した地球の腐海が発する有毒の瘴気に囲まれた限界状況ともいえる小さな「風の谷」で、子どもから大人、そして老人まで互いに気遣い協力しながら暮らしている。限界状況でありながらも「風の谷」に暮らす人たちには人間らしく生きることの誇りがただよい、そしてモラルを失っていない。ナウシカはその部族の族長の娘として生まれ育ち、一族の信頼のもと族長を引き継ぐことになるのだが、欲望と破壊に満ちた外の世界に翻弄されながらも、「風の谷」一族の誇りとモラルを胸に「人間とは何か」を考える。人間とは愚かな生き物である。しかし愚かな生き物であることも承知しながら、一歩ずつ前に踏み出して生きていかなければならないのが人間であるのかもしれない。人類の命運を背負ったナウシカの悩みに、私も共感したくなる。

さて、福祉の理念は、皆が幸せにそして豊かに暮らしていくことにある。少子高齢化、人口減少の進む社会において、ＡＩは好むと好まざるとにかかわらず（救世主のように堂々と）私たちが暮らす社会（職場）に進出してくる。はたしてその先に福祉理念の実現があるのか、前述した人型ロボット「ティリ」との場合のようにＡＩと共生できる社会が到来するのか、私のちっぽけな想像力ではわからない。

せめて「風の谷」の一族のように純粋な人間としての誇りとモラルを忘れずに、そしてナウシカのように強くこの世界に在りたいと願うのである。

●まつお・あきひさ
社会福祉法人北海道療育園・専務理事